

森田芽衣編

森田芽衣編

一月二五日（水）

小野寺さんの隣で、少し潰した中華ポテトの刺さったフォークを掲げたまま、娘の映美が船を漕いでいた。数分前までは睡魔に抵抗していたようだけど、流石に限界らしい。席を立ち、映美の手から何とかフォークを外してベッドまで抱えていく。

小野寺さんは、小皿に残った焼き飯とエビチリを口に運びながら、私が戻ってくるのを目で追いかける。自分の席に戻って、彼女のカップへお茶を注ぎ足した。小野寺さんは自分の口元を抑え、彼女と一緒に持ってきたペーパーナプキンでエビチリのソースを拭う。

「すみません。ありがとうございます」

「いえいえ、こちらこそすみません。お昼までご馳走になっちゃって」

正午より少し早いタイミングで、雁飯店のテイクアウトを提げた小野寺さんがやってきて、映美と共に美味しい中華をいただいってしまった。自分たちの分を払おうと思ったけど、彼女は「商談ついで、経費にできると思うので」と断った。

娘の食べかけを口に運んだ。

「上のお子さんは、幼稚園でしたっけ。旦那さんは」

「今日は珍しく外出してて、武藤さんのオフィスで打ち合わせ、だって」

三年前頃から基本的に家にいて、普段から積極的に家事も育児も手伝ってくれている。亜衣が帰ってきたらちよつと大変だけど、彼は映美が起きる前には帰ってくるだろう。

「ふーん」と頷いていた小野寺さんは、自分の用事を思い出したように、持ってきた荷物をゴソゴソし始めた。私と彼女の前にあったお皿を流しに片付け、彼女が包装紙で包まれた箱を置く前に、軽く布巾でテーブルを拭いた。

「ああ、すみませ〜ん」

「いえいえ」と返していたら、小野寺さんは先ほどの箱をそこに置いた。

「年始の会に芽衣さんだけ来られなかったんで、改めてご挨拶に」

「あら、そんな。わざわざ、ありがとうございます」

包装紙を剥がし、箱を開けると中は個包装の洋菓子、ラングドシャツぽい焼き菓子が入っていた。彼女には先ほど、お父さんからもらったと言う神戸のチョコレートもいただいている。

「こんなに色々、良いんですか？」

「良いんです、良いんです。今年も、よろしくお願いします」

小野寺さんの動きに釣られ、こちらも座ったまま頭を下げる。

「せっかくなんで、コーヒーどうですか？」

「お言葉に甘えて、いただきます」

さつきいただいたチョコレートも、横に出そう。電気ポットに水を入れ、スイッチを入れる。お湯が沸くまでに、食卓を片付け、流しの食器を洗っていく。台所で洗い物をしている間、小野寺さんは椅子を離れて食卓の周りを見て回る。

「え、康徳さん、文学賞取ってるんですか？」

カラーボックスの上に飾った賞状に目を止める。

「地域の小さな賞だから、何にもならないんですけどね」

二つ、三つ、似たような規模の賞状を置いてある。その隣には、五冊の冊子も並べてある。小野寺さんは美容雑誌でも手に取るように、一冊抜き取った。そのまま自然に、パラパラめくる。

「これも、康徳さんの？」

「彼が学生時代に作っていた、同人誌」

小野寺さんは軽いトーンで「へー」と最後までめくって、冊子を元に戻した。

彼女のコーヒーを入れ、食卓に置く。小野寺さんは「ありがとうございます」と言いながら、席についた。彼女は「そっか、書けるんだ」と呟いて、コーヒーを飲んだ。

初出 令和三年二月一八日 アルファポリスにて公開

二月一八日（土）

朝から燃えるゴミを出し、近所の業務スーパーまで週末の買い出しを済ませてから、そろそろ二時間。娘二人を連れて、名神高速沿いに安威川を渡り、人気のパン屋さんへ散歩がてらお昼ご飯を買いに行つて戻つて来ても、旦那はリビングの椅子に座つて考え込んでいた。

一番日当たりが良さそうな椅子に座り、いつになく真剣な表情を浮かべている。結婚する前から考えすぎる人だったけど、長女が生まれてからは家の中で不機嫌な顔を作らないようにしていたけれど、今日は少々不穏な空気を醸していた。

旦那の整った顔立ちに、真剣かつアンニュイな表情の組み合わせは非常に美しいと思うのだけど、まだ幼い子供たちには少々怖く見える気がする。

亜衣と映美と洗面所で手を洗い、さつき買つて来たパンをお皿に出していると、顔の緊張を解いてキッチンまで手伝いに来てくれた。

「あなたも食べる？」

「ああ、うん。僕の分もある？」

パンの詰まった袋を見て、彼は電気ポットでお湯を沸かし始めた。「気が利かなくてごめんね」と人数分のカップを出し、娘たちの分には真新しい牛乳を開けて注いでくれた。娘たちは早々に食卓について、「いただきます」と両手を合わせ、自分たちの目の前にあるパンにかじりついた。

「芽衣も先に食べて。コーヒーは僕が入れる。紅茶の方がよかった？」

イエローラベルの箱を掲げる。「じゃあ、紅茶で」と私は椅子に座った。子供達の様子を見ながら、二人も食べているクリームパンに手をつけた。少し待っていると、康徳さんが紅茶を持つて来て、隣に座った。

ちよっぴり緩慢な動きでミックスサンドを開け、ぼんやりと口に運ぶ。その視線は窓の外に向けられている。

「まだちよつと肌寒いけど、日差しは暖かかったよ。亜衣は途中で上着脱いじやつた」

「へー。午後も天気良さそうだしな……」

彼はもそもそとサンドイッチを咀嚼し、紅茶を啜った。

「公園でも行つてこようか？」

「公園」のフリーズに、亜衣がはしゃぎ始める。食事中に身体を動かし始めた長女を見て、康徳さんの目に少し生気が戻った。

「僕も行こうかな」

「え？」

「身体を動かさないと、頭も動かないし。帰りにアルプラザで、アイス買って帰ろう」

アイスのフリーズにも娘たちは大いにはしゃぐ。アルプラザまで行くと余分な散歩になってしまうけど、今の彼にはそういうものがほしい。

「公園はいいけど、アイスは小さいのにしてよ」

そういうと、亜衣は「えー」と抗議の声を上げる。不満げな長女に「マクドナルドのシェイクにするか」と康徳さんが提案すると、亜衣はすぐに「シェイク、シェイク」と繰り返す。

「もー。仕方ないなあ」

私がそういうと、康徳さんと亜衣は「やったー」とハイタッチした。食べ差しのパンを食べ、しつかりとお昼ご飯と片付けを終えてから外に出る。亜衣とそう約束すると、彼女は行儀良く、しかし少し気忙しくパンを食べ始めた。隣の映美もお姉ちゃんに負けじと自分の選んだパンを食べ進める。

二人の娘を見つめる康徳さんの顔は、ちよつとだけ元気がなさそうに見えた。

初出 令和三年二月二四日 アルファポリスにて公開

二月二日(火)

「もう一回、行ってくる」

亜衣はそう言い残し、一人で長い長いローラーすべり台のスタート地点へ戻っていく。映美は私の隣で、朋子さんの愛犬と戯れあっていた。

「梅はもうどこか、見に行つた？」

朋子さんは愛犬のケビンを視野に入れながら、広い公園をぼんやりと見つめている。彼女に首を振って返事をする、まだ少し肌寒い風が頬を撫でていく。

「まあ、まだ少し早いわね」

「朋子さんは、どこか行かれるんですか？」

「まあ、適当にね」

彼女のことだから、そこら辺の公園とかパッと思いつくような有名な梅園には行かないのだろう。詳細はきつと、FacebookかInstagramで知ることになる。

「そうそう、まだ少し肌寒いからって、運動をサボらないこと。旦那さんも巻き込んで、身体を動かしなさい」

ベンチに座っていた彼女は立ち上がり、ケビンのリードを持って少し大きめにグルッと回った。それに釣られてケビンが、ケビンに釣られて映美が少し遅れて後を追いかける。

「座りっぱなしじゃ、いい仕事できないぞって伝えておいて」

朋子さんはそう言うと、もつと大胆にジグザグと走っていく。愛犬と私の娘を従えて、遠ざかったり近づいたり、速度を上げたり落としたり。映美でも無理なくついていけるレベルの速さで、運動量を増やしていく。

滑り台から帰って来た亜衣まで、彼女らの追いかけてここに参加する。「ママもおいで」とお呼びはかかるけど、荷物番は投げ出せない。芝生の上をたっぷり走り回るのを見ていたら、だんだん映美の足取りが重くなってきた。

朋子さんはゆつくり足を止め、「亜衣ちゃん、ママのところに戻ろうか」とちよつぷり不満そうな亜衣をなだめ、ケビンのリードと映美の手を引いてこちらに戻ってくる。私のところまで来ると、映美はゆつくり船を漕ぎ始めた。

「ごめんなさい。ちよつと、やりすぎちゃった」

「いえいえ。ありがとうございます」

映美を背負い、なおも遊び足りない亜衣に「そろそろ帰るよ」と伝える。「パパもお家で待つてるし」と言うと、ブーたれた表情がいくらか和らいだ。朋子さんは自分のお散歩グッズを手に持ち、私たちの準備が整うのを待つてくれる。

「今日は、バスだっけ？」

朋子さんに頷くと、彼女は公園の出口へ歩き始めた。愛犬との散歩にしては随分ゆつくりのペースで少し前を歩いてくれる。

「旦那の提案、そんなにダメでした？」

手を繋いで歩いている亜衣は、一人で楽しそうに何かの歌を歌っている。朋子さんは「いええ。とつても素晴らしかったわ」と言った。

「芥川龍之介の『河童』なんて、最高じゃない？ この茨木で」

彼女は「い・ば・ら・き・で」ぐらい、ハッキリと強調した。

「川端康成も嫌いじゃないんだけど、ちよつと押し過ぎよね」

今度は周りを行き交う人の耳に入らないよう、小声で言った。「ね」のところまでウインクをされて、ちよつとドキッとする。

犬を連れて歩いても良さそうな道を通り、モノレールの駅を上手に避けて駅前のバスターミナルに到着した。次のバスは一六時三六分。もうそろそろ、休憩中のバスがグルッとこつちへ回つてきそうな気配。

「あの旦那、きつと、もつといい仕事するわ」

朋子さんは少し身体をほぐし、ケビンのリードを持ち替えた。

「だから、もつといい仕事ができるようにサポートしてあげてね」

彼女は「じゃあ」と言うと、かなり足早に自宅サロンの方へ歩いて行った。ケビンも勢いよくついていく。

ロータリーで停車していたバスが乗り場まで回ってくる。私は映美をちよつと背負い直し、亜衣の手を引いてバスが一番後ろの座席に腰を下ろした。彩都の住宅街へ去っていく朋子さんとケビンの背中に、西から差す陽の光が暖かそうだった。

初出 令和三年二月二六日 アルファポリスにて公開

三月一六日（木）

日没後に子供の手を引かずに夜道を歩くのは、なんだかとても久しぶりな気がする。旦那も子供も自宅に残し、一日お手伝いに来てくださったお義母さんを最寄りのバス停までお見送り。

大人が二人並んで歩くにはやや細い歩道を抜け、橋に差し掛かったところでお義母さんが申し訳なさそうに口を開いた。

「食べ散らかしたまま出てきちゃったけど、大丈夫だった？」

夕方に帰宅予定だった康德さんが、一九時を過ぎてようやく帰宅したのと同様に、娘二人と晩ご飯の後片付けもお願いして、少々バタバタと出てきてしまった。

「大丈夫ですよ。こちらこそ、追い立てるみたいになっちゃって、すみません」

「気にしないで。世間の嫁と姑なんて、そんなもんだから」

お義母さんは目を細めて笑った。肯定したものか、否定したものか迷っている間に、お義母さんは話題を切り替える。

「義理の妹さん、予定日いつだったけ？」

「来月末とか、GWとか……」

「じゃあ、あちらはバタバタね。どんどん、うちに頼りなさい。無茶振りも大歓迎」

お義母さんは軽く胸を叩いて、「ドーンとね」とウインクした。

「あの子たちにもイトコができるんだ……。よかった、よかった」

アルプラザの裏口から中に入って、向かいの出入り口を目指す。食品売り場の横を抜けて目の前の道路を左に曲がれば、国道一七一号線に突き当たる。お義母さんの少し前を歩いて先導しながら、話を拾う。

「お義姉さんも、敬子さんも、まだまだコレからありそうですけど」

「あの子たちはダメダメ。敬子もすっかりアラサー、郁美はアラフォー。昔は浮いた話も聞いたけど、最近はね……」

手に職を持つていて、女一人で生きていくには問題なさそうだけど、器量も性格も問題なさそうに見えるところが、かえって災いしてるのか。とはいえ、姉妹

の恋愛事情どころか、本人の色恋沙汰にも一切興味を持つてなさそうな康徳さんが立派なイクメンになるぐらいだから、何があるかは分からない。

一七一号線との交差点で、お義母さんは「ココまでいいわ」と言った。

「あつちの吉野家の前よね？」

「そうです。最後まで、」

「ココでいいわ。信号変わっちゃったし」

お義母さんは、歩行者用の信号を指差した。向かいに渡って左へ戻ったところに、石橋方面行きのバス停がある。

「大事な孫と、出来の悪い息子をよろしく」

お義母さんは私に手を振ると、信号待ちをするために横断歩道へ、二、三步近づいた。背中をじつと見ていたら、私の視線を気にすることなく、スマホを取り出して何やら操作を始めた。

箕面方面行きは順調に流れているように見える。バスは時刻表通りに来て、大した遅延もなく終点へ送り届けてくれるだろう。見えていないと思いつつ、お義母さんの背中に頭を下げ、踵を返した。

来た道に戻り始めると信号が変わったらしい。ちよつとだけ立ち止まって後ろを振り返ると、お義母さんの姿はとっくに見えなくなっていた。

初出 令和三年四月一七日 アルファポリスにて公開

四月一〇日(月)

可愛らしいミツバチにデザインされたハーネスリュックを背負った映美が、だいぶ葉桜気味になってきた元茨木川緑地をせっせと歩いている。つかまり立ちを始めた頃も、頭ごっつん防止のミツバチリュックを背負わせてたけど、上の子よりこの子の方が黄色は似合うかも。

急に走り出すこともなく、新しくなった中条図書館でも静かに大人しくしてたけど、静かなお利口さんだからこそ、黄色とかオレンジが似合うコーデを着せなくなる。もうしばらくは亜衣のお下がりな日もあるだろうけど、この子用の衣類も買いたいな。また今度、大きめのアウトレットまで車を出してもらおう。

グズることもなく、しっかりと自分の足で長時間歩いてくれている。先に図書館でちよつと休憩したとはいえ、少し足を伸ばして久しぶりにラッキードーナッツでお昼兼用のお土産を買い、大人の足でもそれなりの運動量になる一本道を道なりに歩いて、そろそろ終わりが見えてくる。次の交差点を渡れば、そこから先は児童公園になる。

亜衣はあまり見せることがない、驚異のスタミナと集中力で田中橋の交差点まで歩いてしまった。立ち止まったところで、彼女に水筒を差し出す。彼女は両手でしっかりと水筒を持ち、吸い口から水を飲んだ。そろそろトイレが気になる頃だけど、中央図書館はお休みだし、道は逸れるけど、麒麟堂のトイレを借りようかな。

映美の手をしっかりと握って、前後の安全を十分に確かめてから信号を渡る。左手に折れて、正面にAmazonの建屋を見ながら、ちよつぱり交通量の多い歩道を真っ直ぐ進む。広さがあるおかげで、前からも後ろからも時々自転車がやってくる。そのまま児童公園の中を歩いた方が安全なんだけど、仕方ない。

ちよつぱりドキドキしながら、小さな手をしっかりと握って、亜衣がいない間に映美と二人だけで出歩けるのも、あと二年ぐらいだもんね。二年なんてあつという間な気がするけど、子育てしながらの日々はそれなりに長く感じる。

今月中に、亜衣のお誕生日会も待っている。先日の映美のお誕生日もしっかりやったから、それなりにしっかりとやってあげないと。

細心の注意を払いながら、次の交差点までたどり着く。信号を渡った先のファミリーマートに、あまり車が停まっていない。コンビニのトイレという選択肢もあったつけ。途中でゼブンイレブンも見かけたのに、すっかり頭の中から選択肢が消えていた。

お昼時にはちよつと早いおかげで、店内にも人はそんなに多くない。

お店の前まで行き、往來の邪魔にならないところで映美に目線を合わせる。

「おしっこする？」

彼女は首を振る。「お尻、気持ち悪くない？」と尋ねても、彼女は首を振る。

そっか、私が気を揉み過ぎたか。このまま目の前の大通りを歩いて、さつさと家に辿り着いた方が良かったか。

「もうちよつと歩ける？」

映美は首を縦に振った。「じゃあ、行こっか」と彼女の手を引いて、広めの歩道へ出た。「休館日」の札が下がった中央図書館の駐車場の前を通り、Amazonの文字を右前に見ながら真つ直ぐ進む。そろそろ帽子が要る季節。どんな帽子にしようか考えながら、二人でのんびり家を目指した。

初出 令和三年五月四日 アルファポリスにて公開

四月三〇日(日)

ケトルでお湯を沸かしながら、お茶請けになるようなものが何かあったかしら、とお菓子入れを覗く。ソファの上で寝静まっている子供たち向けの物しかなさそうに思える。

どうしたものかと思案していると、車が止まり、玄関から色んな音が聞こえてくる。買い物袋を下げた康徳さんが、「ごめん、ごめん。遅くなった」とリビンクに入ってきた。テーブルに置いた袋の中には、柏餅とちまきが入っていた。

「緑茶はコッチ」

康徳さんは肩にかけた袋から、お茶の袋を取り出して渡しに差し出した。残りには冷蔵庫の前に行つて、野菜室なり、冷凍庫なりに詰め込んでいく。彼はパパッと片付けて、洗面所へ手を洗いに行った。私は彼が戻ってくる前にお茶を淹れ、お客さん用の湯飲みも準備して食卓についた。

「すみません、座ったままで」

康徳さんの赤が入ったコピー用紙を二人で話し込んでいた小野寺さんと、そのお友達の野村さんが顔を上げた。小野寺さんは、野村さんに書類と文具を片付けるように促しつつ、お茶の準備を手伝ってくれた。野村さんもカバンに荷物を仕舞い終わると、「何から何まで、すみません」と、頭を下げた。

「ああ、いいの。座つてて」

彼女まで席を立てて手伝おうとしてくれるけど、広いとは言いつれないキッチンに、そんなに大勢は入らない。小野寺さんに和菓子をセットしてもらい、ポットに追加のお湯を足して、席に着く。康徳さんは私の隣に座ると、スツとピンクの味噌餡に手を伸ばした。

「ちよつ、お客さんより先に取るなんて」

彼はさつさと葉っぱを剥がして、餅にかじりついている。

「こちらが何も持たずに押し掛けるので、気にしないでください」

「本当に、すみません」

小野寺さんと野村さんは、同時に頭を下げる。康徳さんは私の方を見ながら、何事もなかったかのように、餅の残りを口に放り込んだ。

「なっちゃんの分も、選んで」

「いいんですか？」

彼の言葉に、野村さんは私の顔も見る。私が頷くと、彼女は「じゃあ、遠慮なく」と白いこし餡、よもぎの粒餡を選んだ。よもぎの方はふんわりとラップで包んでおく。

私はもう一つの粒餡を手にとってかじりついた。小野寺さん、野村さんも美味しくそうに柏餅を食べている。一人先に食べ終えた康徳さんは、私たちを眺めながら、空いた手でスマホを弄っていた。

「昨日の香帆さん、見に行った？」

彼は、小野寺さんたちに、スマホの画面を差し出した。昨日の春フェス会場で撮影した、香帆さんと義姉さんの写真。ちよつと離れたところで、運転手らしい武藤さんのお父さんの姿も写っている。

お餅を食べ切った小野寺さんは手を拭いて、彼からスマホを受け取った。何枚かスライドして、実母の活躍ぶりを眺めていた。隣から野村さんも画面を覗き込み、「へー、かっこいいね」と、小野寺さんに囁いた。

「収支はまだ未確定だけど、そこそこ儲かったんだって」

小野寺さんからスマホを返してもらいながら、康徳さんは言った。

「今度の茨音も、ねじ込んでもらったんだって？」

「みたいですね。サポートというか、間借りみたいな形らしいですけど」

康徳さんは「みたいですね、つてルミちゃんの頑張りでしょ？」と、小野寺さんに突っ込んだ。彼女は「いえいえ、私の影響力なんて微々たるもので」と小さくなりながら頭を掻いた。

楽しそうな雰囲気壊さないようにスツとキッチンに戻り、ポットに残りのお湯を足す。時計を見ると、そろそろ午後五時になりそうだ。遅くなってしまうけど、お米を研いで夕食の準備も進めねば……。

初出 令和三年五月九日 アルファポリスにて公開

五月四日（水）

映美に背負わせていたハーネスリュックを一回降ろしてもらい、中に入れる物を改めて確認する。私の荷物にも、子供たち用の水分やらオヤツやらは入れてあるものの、最小限の軽いものはこちらにも小分けに入れておきたい。

康徳さんは、アルプラザが開くまで待つて、食品売り場で何か調達してからバスに乗ればいいと言っていたけれど、約束の正午を目安にバスに乗るつもりなら、九時台の便には乗っておきたい。

昨夜の話ではそれで了承し合ったはずなのに、そろそろ出発したい頃合いになつても、康徳さんはZzzを開いたまま動かない。バス停までの道のりを考えると、そろそろタイムリミットだ。

「康徳さん？」

声をかけると、彼は少々驚いてこちらを見た。「ごめん、ごめん。もう出ないとね」と食卓に並んだ荷物に目をやった。私は亜衣にトイレを促し、彼女が戻つてくると映美をトイレに連れていく。トイレから出た映美を康徳さんに任せ、自分たちの出発準備を整える。映美にはハーネスリュックを背負ってもらい、康徳さんは私が持つつもりだった大きなバッグを持つてくれた。開いた手で、映美の手を握つて外へ出る。

玄関横のガレージには、いつでも出かけられそうなマイカーが鎮座している。

ドアにしっかりと鍵をかけ、先に歩き出した亜衣たちを早歩きで追いかける。

「本当にバスで行くの？」

康徳さんは頷いた。怪訝そうな面持ちで「ダメだった？」と聞き返された。

「二人ともしっかりと歩けるんなら、と思つたんだけど。サンデードライバーも怖いしな」

子供らは確かに歩けるようにはなつたけど、行き帰りの道中で、最後までグズらずに歩けるとは思えない。幸い、バス一本で座っていれば着くけれども、余分な荷物は増えるし、寝入った場合の手が足りるかどうかも不安ではある。

「別に、俺が飲めないからつてだけじゃないよ。向こうに長いこと停める場所とかお金とか考えたら、安全も考えてバスでいいじゃん」

連休中の運転は確かにちよつと怖くはある。だったらもつと早い時間帯に出てもいいんだろうけど、今日は無理して動くのも難しい。康徳さんが一杯二杯は飲めない困るのもよく分かるし、今回はバスしかないか……。

「おつと、まだ開いてないんだっけ」

アルプラザの裏手まで来て、康徳さんは建屋の外周道路に沿って右手へ迂回する。駐車場の出入り口に気をつけつつ、西出入り口の方へグルッと回る。正面の道路を左へ進み、一七一号線との交差点を渡った。吉野家の前のバス停で、「阪急石橋行き」を待つ。ここまでは、二人の娘は自分の足でしっかり歩いてくれている。

「次は、四一分か。一本前の奴は行ったばっかりか」

彼は腕時計を見ながら、目の前の通りへ目をやった。反対方向は割とスムーズに流れているけど、こちら側、箕面方面行きはいつもより若干交通量が多い気がする。

「向こうにバスが見えるけど、アレが遅れてる奴だつたらいいんだけど……」

彼は、「餃子の王将」の向こうに見えるバスをジッと見ている。まだ小さくて行き先表示は見えないけれど、阪急バスであるのは間違いないさそうだ。このままスムーズに、約束の時間に間に合えばいいんだけど、と思っていたら、段々近づいてきたバスの行き先には「豊川四丁目」と書いてあった。

初出 令和三年五月一三日 アルファポリスにて公開

五月二二日(日)

茨木イオン一階のフードコートで、家族が到着するのを待ちながら、小さめのスケッチブックを広げてペンを走らせている。もうそろそろ夕方、向こうのスタバもサーティーワンも含め、家族連れでごった返している。

私は二人がけの席で周囲を少し警戒しながらも、気が赴くまま、筆が赴くままに絵を描いている。ここで落ち合う約束をした家族がやってくるなら、康徳さんから連絡があるはず。今のところはまだ、「家を出ました」のメッセージしか届いていない。少々安心して、時折往來を眺めて目を休めては、スケッチブックに向かうというのを繰り返していた。

あんなに尊いものを見せられて、家に帰るまで何も描けないなんて拷問に近い。普通に帰宅してしまうと、ママを終わってからでないとペンが取れない。今うち、この瞬間にパパパッと下書きでも終えられたら、少なくともこの先一週間ぐらいは穏やかでいられる。座席を探してフードコートを彷徨っているお客様方、大変申し訳ない……。

「アレ、森田さんの奥さん？」

不意に上から声をかけられる。身体はびくつと震え、変な線を引つ張ってペンを止まる。顔を上げるとそこにいたのは、武藤さんのところの娘さんと、従業員くんのお連れさん。確か、陽菜ちゃんと瑞希さん。二人とも同じパンフレットを下げ、私を見つめている。

「こ、こんにちは」

私はそつとスケッチブックを閉じて、カバンにしまう。陽菜ちゃんは私の荷物をジッと見ている。

「森田さんも、ですか？」

彼女は、私の顔をいつになくキラキラした目で見つめてくる。入れ物の袋こそ違えど、中身のパンフレットは三人一緒。瑞希さんは袋にもピンときたらしく、黙って小さく頷いている。

陽菜ちゃんは椅子を二つ持つてきて、往來の邪魔にならないところに置いた。

瑞希さんと共に並んで座る。

「もしかして、さっきの絵も？」

彼女らは興味津々の目でさつき片付けたスケッチブックを見ている。

「ええ、まあ」

「もう一回、見せてもらってもいいですか？」

「そ、それはちよつとごめんなさい」

私がスケッチブックに手を置いて頭を下げると、向こうの二人は私より大きな動きで謝った。私は二人をなだめ、話題を切り替える。

「二人はここで見たの？」

私には珍しい組み合わせに思えるけど、どうやら趣味が似ていると最近判明したらしく、時間を合わせて仲良く上の劇場に見にきたらしい。嬉々として語り始める彼女らを嬉しく思う反面、ちよつぴり恥ずかしい気にもなってくる。

「で、このまま母の誕生日プレゼントを見ていこうと思って」

「史穂さんのお誕生日、明日だけ」

そういえば、そんな話を聞いた気もする。陽菜ちゃんの予定に付き合っただけの瑞希さん、えらいなあ。

「おお、陽菜」

向こうから大きな声が聞こえてくる。そちらを見ると、武藤さんご一家がゾロゾロと歩いてくる。隣には、駐車場で合流したらしい康徳さんたちの姿も見える。陽菜ちゃんは、お父さんに冷たい視線を向ける。

「珍しい組み合わせだね」

康徳さんは私と瑞希さんを見ながら言った。彼が手を引いていた亜衣は、「おかあさくん」と足元にぶつかってくる。康徳さんは映美を抱っこし直す。

「今から、ちよつと早いお誕生日回なんだって。よかったら、君も一緒に行かない？」

彼は瑞希さんに視線を送るが、彼女は「私はここで」とやんわり断った。「陽菜ちゃん、またね」と武藤さん一家の中でもみくちゃんになっている陽菜ちゃんに声をかけ、私に挨拶すると、瑞希さんは駅の方へ出る出口に向かって歩き始めた。

初出 令和三年五月一八日 アルファポリスにて公開

六月五日（月）

窓の外は、昨夜から猛烈な雨が降り続けている。朝方、亜衣を幼稚園に送り出す頃には少しマシになっていただけ、一人で留守番している間に雨脚は再び強まってきた。旦那と下の娘は、亜衣を送り出すタイミングで一緒に外に出て、今、自宅に居るのは私だけ。

電気も点けず、寝室に一人、ベッドの上で横になっている。家の中に響くのは、外で降っている雨の音と、遠くの方で仕事をしてきている冷蔵庫の音だけ。

時々、ブブブツとスマホのバイブレーションが短めに鳴る。通話じゃなくて、何かの通知。いちいち内容を確かめるのも億劫で、そのままほったらかしにして天井を見つめている。

梅雨時だから、雨も降る。強めの雨が夜通し降ることもある。でも、よりによってヘトヘトなタイミングで、強烈な低気圧を持ってこなくてもいいのに。家中に仕掛けた吸湿剤の働きも虚しく、高い湿気が肌に張り付いて息苦しさに拍車がかかる。

子供を連れ出す方が楽だろうと気を回してくれたんだろうけど、ありがたい反面、一人きりになる寂しさ、孤独さもある。とはいえ、もうそろそろお昼過ぎ。

亜衣が幼稚園から帰ってくる前には、旦那も映美も戻ってくるだろう。

もう少し横になって、グダグダしながらママをやるためのパワーを捻り出そう。気怠い女のまま、家族の前に、娘たちの前に姿を見せたくない。

試しに目を閉じてみる。微かな眠気はあるものの、寝入るだけの眠さじゃない。仰向けになったまま、しばらくゴロゴロしてみる。スマホのブブブも気になるけど、ここで画面を見ってしまうと寝れなくなる。グツと堪えて、力を抜く。あ、いい感じに寝れそうな気がする――。

ガレージに車が止まる音で、意識が呼び戻される。一瞬意識が飛んだ気がするけど、少しは寝れたんだっけ？ 枕元のスマホに手を伸ばし、時間を確かめる。午後一時を少し過ぎたところ。二〇分ちよつとぐらい、気絶するように寝てたのか。

ベッドの上で体を起こし、電気を点ける。三面鏡の前まで行って、自分の顔を

確かめる。少々むくんでいるような気はするけど、寝ぼけ眼と髪が膨れ上がっている程度。今日は外に出ないだろうし、顔を洗えば何とかなるか。

洗面所に向かって階段を降りると、帰宅済みの旦那と映美とが、リビングでアンパンマンを再生していた。まだ目はよく開かないけど、声だけかけておく。

「おかえり」

我ながらひどい声だと思っただけど、康德さんは微塵も嫌そうな顔をしないで、こちらを振り返って「ただいま」と言ってくれた。

「お昼、食べた？」

「まだだけど」

「母さんがお昼作ってくれたから、冷蔵庫から出して食べてよ」

彼は冷蔵庫の方を指した。扉を開けると、確かにビニール袋に包まれたタッパーが入っている。

「亜衣のお迎えも僕が映美と行ってくるし、ゆっくりしててよ」

彼は私の「ありがとう」を待たず、目の前のタブレットに視線を戻した。映美と一緒に、アンパンマンの世界を楽しんでいる。体調が悪い時に、自分以外の人ที่บ้านにいる。煩わしいこともあるけど、やっぱりコレがいい。

私はとりあえず洗面所に足を運んだ。顔を洗って、お昼を食べよう。できる範囲で、ママをやろう。冷たい水を滴らせながら、鏡の中の自分に笑いかけてみた。

初出 令和三年五月二一日 アルファポリスにて公開

六月二十四日（土）

「まだちょっと寒いかと思っただけど、結構人いっぱいだったね」

康徳さんは呑気に、まだ少し濡れた頭を拭いていた。私は親子連れでこつた返しているロビーで忘れ物がないか確かめながら、彼に任せた亜衣と映美をこっそり見守る。

夏にはまだ少し早い、六月末の雨の土曜日。しばらく外に出られていない子供たちのリフレッシュにもなればと連れてくるまでは良かったんだけど、「みんな考えることは同じだね」と康徳さんは笑う。

「この後も、みんな考えることが同じなら、イオンに寄らずに帰っちゃう方がいいか」

「ちょっと見たかったけどね」

「流石に仕方ない、か」

彼に子供たちの荷物を持ってもらい、空いた手で亜衣の手を握ってもらう。私は映美を抱き抱え、自分たちの荷物を肩から下げた。お隣に座っていた親子連れに軽く挨拶して、駐車場へ向かう。

子供達の体力と集中力が保たなくて早めに引き上げるから、未だマシなのかも。一七時を過ぎてからだと、ロビーも出入り口ももつと詰まっていたかもしれない。

更衣室ほど混雑することなく、スムーズに車のところまで戻り、子供たちと荷物を後部座席とトランクに載せた。私が助手席、康徳さんが運転席に座り、シートベルトをつけ、車を走らせる。

後部座席のチャイルドシートの中で、亜衣、映美が徐々に賑やかに遊び始める。あれだけプールで体力を消耗したはずなのに、まだまだ元気とは恐れ入る。康徳さんもルームミラーで後ろの様子を見ながら、笑顔を浮かべる。

「買い物、どうしよっか」

彼は、一七一号線へ抜けるか、名神高速沿いの太田橋方面へ抜けるかで悩んでいるらしい。

「とりあえず、アルプラザ目指すので良いんじゃない？」

「そっちの方が、サンデードライバーも少ない、か。了解」

彼は川に沿って、車を北へ走らせる。対向車が来るとちよつと怖い道幅だけど、彼は何なくイオンの裏を抜け、高圧線の鉄塔の下をグルッと回って、スーツと車列に合流した。太田橋を渡って、業務スーパールの裏へ抜ける道に車を進ませる。目の前にジャパンの看板が見えてくる頃には、後部座席がすっかり静かになっていた。

「どうする？ 寄っていく？」

彼は交差点を左折して、業務スーパーの方を指した。駐車場も割と空いているような気がするけど、土曜日の夕方に来て、目ぼしい物はなさそうな気がする。私がスツと返事をしないと、何かを察したらしく、康徳さんはそのまま車を走らせた。

さつき潜った名神高速の高架の手前で、今度はグーッと右手の細い道へ入っていく。蕨原小学校の裏を抜け、茨木川の手前まで行く一方通行。自由に左右を走り抜けていく自転車に気をつけながら、広いとは言えない道をスムーズに抜けていく。

後ろの二人は随分前から動きをピタッと止め、チャイルドシートの中で寝息を立てている。もうしばらくは起きないと思うけど、どうしようかな。

出かける前に見た冷蔵庫の中身を必死に思い出す。食パンはあつた気がするけど、野菜だ何だはちよつと心許ない。薬局もそろそろ寄っておきたかつたんだっけ。アルプラザなら、この子らが起きても何とかなるか。

「アルプラザで、良いんだっけ？」

信号が見えてきたところで康徳さんが言った。私がすっかり頷くのを見て、彼は「了解」と呟いた。

初出 令和三年五月二五日 アルファポリスにて公開

七月二一日（金）

金曜日の夕方に、アルプラザの食品売り場でレジに並んでいるのは久しぶりかもしれない。亜衣と映美の二人を連れながら、大人一人でそこそこ混雑するところ突っ込んでいくのはちよっぴり怖かったけど、二人とも大人しく、お利口さで成長を感じた。ご褒美に、普段なら滅多に買わないポケット菓子も二つ、三つカゴに入れてしまった。

康徳さんに頼まれたのはネギだけだったのに、会計を終え、サツカ台で手提げ袋に荷物を詰め終えると、そこそこ大きな荷物になっていた。どうせ明日も買い出しするんだけど、まあ、いいか。

週末の夕方、フードコートには学生さんが多い気がするけど、そもそも、もうそろそろ夏休み？ 来週には色んなところで小学生や親子連れも見かけるようになる、か。シャトレーゼとかケンタッキーに後ろ髪を引かれながら、アルプラザを後にする。

亜衣と映美に気をつけながら、「もう直ぐ帰る」と康徳さんにメッセージを送る。すぐに「了解」と返事が帰ってきた。向こうはもう落ち着いている？

すぐ隣を歩き来する自動車や、向かいからやってくる自転車に気をつけながら、川を渡り、住宅街に入っていく。亜衣が先に自宅のドアを開ける。扉で手を挟まないでと祈るように見守りながら、彼女が離れたドアに手を伸ばす。奥から、康徳さんの「おかえり」という声が聞こえてくる。

映美と一緒にリビングへ入ると、康徳さんはキッチンから顔を出した。私たちに「おかえり」と言った。私は手提げ袋を食卓に置き、中身をそこに出す。彼は「買い出し、ありがとう。後は、よろしく」と言うと、両手を洗い、亜衣と映美を洗面所に連れて行く。

私はお菓子をストッカーに仕舞い、残りの食品を冷蔵庫にしまうべく、キッチンに足を踏み入れた。餃子を放り込んだスープと、チャーハンのセットという段取りらしい。スープは出来上がっていて、チャーハンは今から炒め始めるようだ。とりあえず流しで手を洗い、買ってきた白ネギを刻む。スープとチャーハンのどちらに入れるのか、どんなチャーハンにするつもりなのか、戻ってきた本人に

聞いてみよう。

ほんの数分で、娘二人を連れ戻した康徳さんが戻ってくる。彼は私の顔とキッチンを見るなり、「ネギはチャーハンかな。スープは温めるだけ」と言った。

エプロンをつけたままの彼を見つめていると、「あ、じゃあ、こつちを頼む。そつちは最後まで僕がやるよ」と、彼は取り込んでくれていた洗濯物を指差した。私は手を洗い、タオルで手を拭って、キッチンから出た。康徳さんから娘二人を引き継いで、入れ替わりに彼に調理を再開してもらおう。

私はテレビをつけ、子どもたちが興味を持ちそうな番組にチャンネルを合わせると、畳まれていない衣類に手を伸ばした。亜衣と映美はすぐにテレビに夢中になり、大人しくはないものの、自分たちだけで遊んでくれている。

キッチンからは美味しそうなゴマ油と中華スープの匂いが漂ってくる。洗濯物を畳み終えたら、食器の準備ぐらいは手伝わなきゃ。週末の天気予報も、そろそろチェックしておかないと。半ば無意識に両手を動かしながら、この後の段取りに思考を巡らせた。

初出 令和三年九月三日 アルファポリスにて公開

八月六日（日）

亀岡から山間を通り抜け、昨日も見たような川沿いの道をクネクネ進む。信号を越えてしばらく行くと、見通しの良い直線道路が見えてきた。車で実家まで行き来する時はよく通る道なのに、もう少し行つてサイゼリヤ、その先のコーナーぐらゐまで行かないと見慣れた景色という感覚にならない。

「このまま、真つ直ぐで良いんだっけ？」

サイゼリヤの看板が左手前に見えてきたタイミングで、隣でハンドルを握る雄輔が口を開いた。次の信号を右折してもいいけど、まだ真つ直ぐ行つたルートの方が、私としては見慣れている。

「うん。まだ道なりで。業務スパーが見えてくるから、その次の信号まではこのままで」

「りょーかい」

雄輔は軽い調子で返事をする、私の注文通りに信号を直進する。右側にコーナンの看板が見えてきて、だんだん生活圏に戻ってきたつて感じがしてくる。業務スパーの前は日曜日の夕方だというのに、駐車場に入れない車が列をなしている。それを横目に道なりにカーブを曲がると、次の信号が見えてくる。

「次は右折だっけ？」

「そう。手前の横断歩道をさらに右折ね。グルつと曲がつて細い方」

「ほーい」

雄輔は私に指示されるがまま、喫茶店の看板が置いてある細い道へ車を入れる。目の前に街の電気屋さんを見ながら、一方通行の狭い道を西へ進む。

「で、この後川沿いに出て、アルプラザでいいんだっけ？」

雄輔は左右の細道にも気をつけながら、前を見たまま言った。

「買い物してから、家まで送らなくて良いの？」

「そこまで付き合ってもらうのは、流石に気が引けるといふか」

「別に良いよ。今から帰つたつて、どうせ一人だし。お義兄さんにも、しばらく会つてないし」

「あれ、そうだっけ？」

月一ぐらいで康徳さんと共に、娘たちを連れて実家に帰つてるけど、雄輔は居なかつたつけ。今年は牧人夫妻とやりとりする機会が多くて、実家との関係性も強くなつてた気がしたけど、独身の末弟のことは記憶からすっぽり抜け落ちていたか。

「お義兄さんも忙しそうだし、邪魔になるならアルプラザで降ろして帰るけど」

雄輔は口を動かしながらハンドルを切った。車は川沿いの土手に出て、西国街道にぶつかる信号まで来た。左折すれば、すぐにアルプラザ。

カーナビの時計は、一六時二二分。今から折り返して実家に帰っても、早くて一八時。ここまで送ってもらつたのに、降ろしてもらつて適当に「さようなら」というのも可哀想か。

「ノンアルコールでも良いなら、晩ご飯ご馳走するけど？」

「え、いいの？ ノンアルコールでも、何でも良いよ。じゃあ、駐車場に入れちゃうね」

雄輔は、アルプラザの裏口に回らず、駐車場の入り口へ向けて車を進めた。私はスマホを取り出して、実家宛に雄輔はうちで晩ご飯を食べてから帰る旨を伝え、康徳さん宛に雄輔の分も晩ご飯の頭数に入れてもらうよう、メッセージを送った。康徳さんからすぐに、「了解」の言葉が返ってくる。

雄輔はアルプラザの屋上駐車場へ車を止め、鼻歌まじりにシートベルトを外した。私は彼の嬉しそうな顔を見ながら、今晚の献立と、今から買わなきゃいけないリストとを頭に思い描いていた。

初出 令和三年九月一七日 アルファポリスにて公開

八月一日（金）

朝食を終え、早々にテレビの前で遊び始める亜衣と、隣でそれを見ている映美。私は食器を洗いながら、いつもよりエンジンの掛かりが悪そうな夫を眺めていた。彼はボサボサの寝癖を気にすることなく、ぼんやりとテレビや子供たちの方へ目を向けている。

「本当に、迎えに来てもらわなくてよかったの？」

目の前で流れる水の音に負けないよう、少し大きめの声で言った。彼は頷いて、ゆっくりと振り返った。大きな欠伸をしながら、「僕が運転するよ」と答えた。

「最近、雄輔さんに頼ってばかりだし。帰りは電車って訳にもいかないし」

実家までの送り迎えぐらいなら、雄輔は喜んでやってくれると思うけど、彼なりに何か引つかかっているのだろう。

「無理してない？」

彼は自信たっぷり「大丈夫」と言った。私とのやり取りで多少は血が回るようになっただけ、徐々にいつも通りの彼に戻ってきた。私は彼に新しいコーヒーを入れる。彼が「ありがとう」とゆっくりそれを飲む間に、子ども達を洗面所に誘導して歯磨きを済ませた。リビングに戻ると、今度は二人とも子供番組に釘付けになり、テレビの前で大人しく座っている。

「じゃあ、今パパッと入ってくる」

康徳さんはコーヒーを飲み切ると、カップを流しに置いて風呂場へ向かった。しばらくすると、シャワーの音が聞こえてくる。

時計に目をやると、まだ八時を過ぎたところ。今から準備して九時過ぎ出発は流石に早すぎるけど、必要なものぐらい整理しておいてもいい頃合い。お盆のお供えと、道中の子供たちの水分、あとはいつものお出かけセット、と。酔い止めの薬も出しておかないと。

さつきまで朝食が並んでいた食卓に、荷物がどんどん固められていく。今回はパパッと日帰りだから、いつもより量は少ない。トローチタイプの酔い止め薬も、カバンの横に添えておく。

実家近くの駐車場も探しておかないと。牧人も車で来ると言ってたし、実家の

空きスペースはそつちに譲ろう。雄輔がもう起きていることを願って、彼に「駐車場、どこかあったっけ」とLINEした。自分で変に検索するより、彼の方が詳しいだろう。すぐに返信がなくても、向こうへ着くまでには何かしら返事があるはず。

シャワーの音が聞こえなくなると、今度は電気シェーバーの音が聞こえてきた。私は流しに残っていた食器を洗い、食器乾燥機つまみを回した。康徳さんは、髪もしっかりセットし終えてリビングに戻ってきた。

彼は私に、「どうぞ」と洗面所の方を示した。私は「ありがとう」と返し、「子供たちお願い」と伝えて洗面所に移った。目元だけ簡単に化粧して、ボサボサの髪へ櫛を入れ、少しだけ整えた。

リビングに戻ると、康徳さんは外行きに格好に着替え、子供たちと楽しそうに遊んでいた。

「牧人くんへの誕生日プレゼントとか、買って行った方がいいの？」

彼は地図アプリを見ながら言った。私は首を振りながら、「いや、いや、いや」と答える。

「了解。じゃあ、混むつもりでボチボチ行こうか」

康徳さんはトイレに向かった。私は亜衣と映美に酔い止め薬を舐めさせ、食卓の荷物を玄関に運んだ。康徳さんがトイレから出てきたら、順番に子供達と私のトイレを済ませて、外に出る。道中の段取りもなんとなく頭の中に描き、指を折り曲げながら一つ一つ確かめた。

初出 令和三年九月二三日 アルファポリスにて公開

九月二〇日（水）

食後のコーヒーを味わいながら、お腹を落ち着かせる。子供たちを旦那に任せて、外でゆっくりランチを摂るのはいつぶりだろう？ 子供のことを気にしないで、食事に集中できるのはとてもありがたい。

「さて、と。そろそろ、例のものを」

向かいの席に座っている敬子さんは、隣の座席に置いたカバンを探り、中身が見えにくい色の四角いビニール袋を取り出した。テーブルの上に置いて、品物を押し出した。前は、わざわざテーブルの下に手を回してやり取りしたっけ。

私はそれを受け取り、小さく開いて隙間から中身を確かめる。

「確かに」

私はそのままカバンの底の方に、慎重にビニール袋を仕舞った。

「いつも急な呼び出しでゴメンね」

「敬ちゃんのせいじゃないから、気にしないで」

彼女の方が忙しいはずなのに、毎回、入念に根回しをして時間を作ってくれる。定期的にこうやって呼び出ししてくれるおかげで、お昼時に外食もできている。

「新しい職場はどう？」

「一言で言うと、まあまあ。可もなく不可もなくってところかな」

前の職場を辞めて、しばらくは資格を生かして友達のお手伝いもしていたらしいけど、結局、先月の頭から看護師に復帰しているのだとか。

「そっちはそろそろ、第三号が出るんじゃないの？」

「今回は思い切って、五〇〇部刷るんだって」

敬子さんは「へー、一気に五〇〇？」と目を丸くした。スマールスタートで始めたはずなのに、少しずつ部数を増やすはずが、アクセスの増加も鑑みて思い切った増やすことを決めたらしい。

「でも、芽衣さんのフォロワー、一万とか二万とか居るんでしょ？」

「私の場合、長いことやってるだけだから」

義理の妹の手前、夫を立てて謙遜してみるものの、執筆者の認知度や作品のクオリティーを鑑みると、もう少し思い切った勝負してもいいんじゃないかとは思

う。

「でも、数千部とかになつてくると他の仕事はやりにくくなるか」

「あゝ、それはあるかもね」

ウェブ制作の仕事とか、コンサルティングの仕事なんかは減らさないと厳しくはなる。本人も作家の一人として関与したいだろうけど、それも辞めて編集や営業活動に専念せざるを得なくなるかもしれない。

「可哀想な気もするし、思い切つて一本に絞っちゃう方がいい気もするし、難しいところだな」

そつちを選んだ方が経済的にも安定するだろうし、ヒイラギに込めた想いも達成しやすくなるんだろうけど、「作家の彼」がもっと活躍するところ、大きくなるところを見たい気もする。

「そうそう、一本に絞るといえば、いよいよ姉さんが腹を括つたんだって」

「本当に？」

敬子さんは首を縦に振った。

「年内か、年明け早々には退職して、自分のお店に集中するんだって」

いきなり自分のお店を構えるには至らないとしても、今までの取り組みで少しずつファンも獲得して来ているみたいだし、宿借りとかを経て、一国一城の主になる日も遠くはないのだろう。

「やっぱりお兄ちゃんも、」

「一つに絞つた方がいいのかな」

本人の意向が最優先には違いはないけど、背中を押すべきか、相談ぐらいはするべきか。コーヒーの苦味と共に、悩ましい気持ちを飲み込もう。

初出 令和三年一〇月一四日 アルファポリスにて公開

一〇月一四日(土)

おやつ時間も過ぎて、そろそろ夕方というタイミング。今の時期にコレぐらいの時間帯は、若干肌寒い。向こうで浪川さんや康徳さんらと走り回っている亜衣、映美の二人は寒さを感じるどころか、ちよつと汗ばむぐらいらしい。

私は屋根の下でベンチに座り、沙綾さんがコンビニで買ってきてくれたホットコーヒーに、両手を添えて暖まっている。沙綾さんは私の向かいに座り、湯気を立てながらコーヒーを飲んだ。

「お茶も奢ってもらったのにコーヒー代まで」

私は、沙綾さんに頭を下げた。彼女は「いえいえ」と応えた。

「おまけに半日遊んでもらっちゃって。何から何まで、ありがとうございます」

「いえいえ、こちらこそ。普段から母が迷惑かけてるのに、今度は彼氏までお世話になっちゃって」

「迷惑だなんて、そんな……」

今日も元々は、朋子さんに呼び出されたのがキツカケだった。彼女とのやりとり、あるいは施術してもらっている間はそれなりに緊張もあるけど、それが嫌だとか、負担になる感覚はあまりない。

娘たちにもよくしてくれるし、旦那のことも強くバックアップ、時にはハッパもかけてくれているし、感謝こそすれ、迷惑だなんて思ったことはない。

今日は何やら、浪川さんからのお礼も込められているようだけど、こんなに良くしてもらうような「お世話」をした覚えもあまりない。康徳さんが何かしたのかと思っただけど、どうやら私の何か彼何かに役立ったのだとか。

「ちなみなんですけど、旦那さんってご兄弟いらつしゃいますよね？」

沙綾さんが、いつも滲刺として彼女にしては珍しく、おずおずとした様子で声をかけてきた。私は思わず真剣な表情で、彼女の方を見る。

「兄弟っていうか、お姉さんと妹さんがいるね」

「義理のお姉さんとか、妹さんとお付き合いつて、どんな感じですか？」

「どんなって言われても……」

普段、どんなお付き合いつてたつて、と脳味噌を働かせる。敬子さんとはなん

となくウマが合うというか、趣味が合うというか、なんとなく通じるものがあつて旦那も知らない付き合いがあるぐらいだけど、姉の郁美さんとはそこまで仲がいいという感覚はない。

沙綾さんとはちよつと違うニュアンスで線が太いというか、主張の強い性格をしていることもあるけど、お姑さんより距離があるお付き合いをしているかも。

私が素直にそのまま伝えると、沙綾さんは「やつぱり、そういうもんですよね」と苦笑いを浮かべた。

「妹の瑞希さんとは今でも仲良くしてるというか、歳の離れた親友ぐらいの気持ちなんですけど、どうも真ん中の弟さんが距離感が難しいというか、仲良くなれる気がしなくって」

そういえば、彼女と瑞希さんは色々やってたつげ。それぞれちよつぱり気難しそうな性格をしているだけに、仲良くしているのが不思議に思える。浪川さんのすぐ下の弟さんというのは、私はあまり面識がないから、性格や空気感云々は全く分からない。

「ま、無理しなくてもいいんじゃない？ お姑さんとか、義父さんとかと仲が良ければ、なんとかなると思っうし」

沙綾さんはさつきと同じトーンで、「ですよね」と笑みを浮かべた。彼女が視線をやった先にいる康德さんも、私の弟たちとはギクシヤクしながら関係性を築いて行つた。器用な彼女のことだから、きつと上手くやるだろう。

初出 令和三年一〇月二五日 アルファポリスにて公開

一〇月二三日（月）

右手を見ればJRの高架が見え、左手の方を見れば向こうの方に阪急電車のすれ違いが見える。目の前には、右の方から左の方へ流れていく川がある。土日や夕方なら、すぐその高架下やランニングコースを走る人がもつといるのだろうけど、月曜日の午前中は流石にといった様子。

私はここまで歩いてきた足を休め、呼吸を整えながら、目の前の流れを延々と眺めている。対岸の河川敷を駆け抜けていく人、のんびりウォーキングしている人を時々観察しながら、その人の人となりや生活を勝手に想像してみたりする。

こうして、ただポーツとしながら、たまに人間観察していると何かが閃くかもしれない。アイディアの端緒、描きたいシーンのぼんやりとしたイメージ、妄想するきっかけが少しでも掴めれば十分なんだけど、すぐにポンポンと出てこないから、こんなところで川や河川敷を観察しているのだろう。

左手、下流の方を眺めていると、黒いジャージに身を包んだ男性が、こちらに向かつて歩いてきている。豊かなグレイヘアと歩き方に、なんとなく見覚えがあるような気がすると思つて見ていると、向こうも私の視線に気がついたらしく、こちらを向いた。

「ああ、どうも」

顔がはつきり分かれるところまでくると、相手の男性は手を上げて挨拶してくれた。

「先日はお土産、ありがとうございました」

「いえいえ、いつもお世話になっておりますから」

相手の男性、武藤さんはウォーキングを中断して、立ち止まってくれた。彼は、私の周りを見ながら、「今日は、お一人ですか？」と訊いた。

「旦那に任せて来ちゃいました」

「武藤さんは小さく声を漏らしながら、小刻みに頷いた。」

「武藤さんは？」

「健康のために少し歩こうかと」

彼は対岸の方を指差しながら、下流の方へ空中で弧を描きながら説明してくれ

た。お家がある上流の方からではなく、下流の方から歩いて来たのは、すでにラ
ンニングコースのゴール地点まで行って来たかららしい。

微妙に蛇行する川に沿って、玉島小学校の裏辺りまで行くと、それなりの距離
がある。

「あそこまで行って戻って来たんですか？」

「いやいや、運動としては全然足りなくらいですよ」

武藤さんはサラッと言った。

「本当は走った方がいいんですけど、この年で急に走るのもね」

彼の懸念に思わず「そうですね」と同意の言葉が漏れた。武藤さんは何かを思
い出したようにスマホを取り出し、「ああ、でも今度ね」と画面を操作して私に
見せた。

「ノルディックウォーク教室があるとかで、これに妻と参加しようかと」

次の土日に、近隣の有志が主宰でノルディックウォーキングの講習会をやるら
しい。参加する前に自分で調べて、杖はすでに買ってあるのだとか。

「まだ杖があるみたいなんで、森田さんはどうです？」

私が武藤さんにスマホを返すと、彼はそれを仕舞いながら言った。

「気分転換にもなるし、頭にもいい刺激になるらしいですよ」

健康に大きな不安があるとは言わないものの、体力維持に何かしたい気持ちは
ある。杖をつきながらの全身運動は、頭も確かに動いてくれるかもしれない。

私が「旦那と相談してみます」と言うと、武藤さんは「そうですね。ではで
は」とウォーキングを再開して上流の方へちよっぴり早足で歩いていく。

ウォーキングか。ここでボーツとしているよりは、良いかもしれない。ちよっ
と行ったところにあるパン屋さんにでも寄って、お昼ご飯を買って帰ろう。

随分と先に行ってしまった武藤さんの背中を、無理のない速さで追いかける。

ちよっぴり肌寒い空気がちょうど良い。閃きよ、来るなら今だ。

初出 令和三年一〇月二七日 アルファポリスにて公開

一月十四日(火)

康德さんは椅子に腰掛けたままグツと上に身体を伸ばし、一気に脱力した。気持ちよさそうに声が漏れている。充実感に満ちた表情から、「一仕事終わりました」という気持ちが伝わってくる。

「行けた？」

「うん、行けた」

ほぼ鸚鵡返しに、力強い声が帰ってくる。今のところ、二ヶ月に一回やってくる山場。今回もなんとか無事に乗り越えたらしい。

「部数は一旦、刻んで七〇〇。来年一発目で一〇〇〇部かな」

「いよいよ大台じゃん」

「だね」

私の感覚としては、今月末の第四号で一気に一〇〇〇部でも大丈夫な気がするけど、主宰者、編集長としての判断、戦略があるのだろう。次で一〇〇〇部でも十分順調だとも思う。

「部数を伸ばすより、次の目標の毎月刊行の方が大変なんだろうな」

康德さんは、近くで遊んでいた映美に「ねー」と語りかけるも、彼女は何のことやらさっぱりと言った様子で、首を傾げて遊びに戻った。

「文章のストックはあるけど、一気に倍はキツイよね」

漫画や表紙イラストの期日、猶予も半分になるのも楽ではない。執筆以外の事務作業、その他の業務も倍になってしまうと、「部活っぽさ」は薄れて「お仕事」になっていく。それだけでなく、単純に康德さんを取り巻く今の体制では、その業務を捌き切るのは無理がある。

「もう少しアマチュアの手作り感で行きたい気もするし、やるならちゃんと仕事にしたい気持ちもあるし、悩ましいよね」

「充分に人が集まってくるまでは、しばらく今のままがいいんじゃない？」

「芽衣はそう思う？」

康德さんは「それも正しいよね」と頷いた。ウェブメディアもあつて、紙媒体もある後発の同人誌としては悪くない成長をしていると思うけど、いきなり大

風呂敷を広げるのは時期尚早な気がする。

執筆陣もまだまだ「濃い」だけの人もいるし、埋もれている才能に届いていない気もするし。何より、編集が足りないように思う。康徳さんの色、雑誌として守りたい空気や方向性にいきなり合致する編集者なんて、そんなにいないだろう。「色んな人に作家の取りまとめはしてもらってるけど、ちゃんと編集を育てないとダメなんじゃない？」

「そっなんだけどさ、『マトモな編集』も難しいし、オレっぽい感覚の編集は、育てるのはキツいかな。波長が合う人と出会う方が早い気がする」

編集としてしっかり仕事をしてもらうには、他に充分な仕事も必要だし、と彼は補足した。既にできる人の中から、合う人を見つけていく、出会うには、しばらくは今のまま部数を伸ばす他ないように思う。

「鶏か卵か。部数か編集者か。こういうとき、大抵は鶏も卵も、だよね？」

康徳さんは一人で何か考えながら、「こいつは大変だ」と呟いた。

「でも、皆さんでやればいいんじゃない？ 私も手伝うし」

今度は私が映美に「ねー」と笑いかけた。彼女は私につられて嬉しそうに笑う。

「最初からそのつもりだけど、皆さんでやるのも大変なんだぞ」

彼は笑いながら言うと、手元の大きなノートを開いた。既に色んな書き込みがしてあるページをめくり、新しく何かを書き込んでいく。まずは自分なりのプランをまとめられるらしい。真剣な表情で目を輝かせながら、縦横無尽にペンを走らせていた。

初出 令和三年一月二日 アルファポリスにて公開

一二月五日（火）

遊び疲れた娘たちは、二人ともソファの上で横になっっている。子供部屋から毛布を取ってきて、起こさないように注意しながらかけてあげた。

「ベッドに連れて行った方がいいんじゃないの？」

食卓でコーヒーを飲んでいた母が、二人の寝顔を見ながら言った。

「お風呂もまだだし、孫の寝顔をじっくり見たいでしょ？」

私は亜衣の口元の汚れを優しく拭きながら、母に向けて言った。映美の方はそこまで汚れていないらしい。

「私のことなんか気にしないで、お風呂に入れちゃいな」

母の言うことももつとみだれ、ようやくひと段落ついたところ。康徳さんもうそろそろ帰る頃だし、本格的にベッドへ連れていくのはそれからでもいい。お風呂に入れるのも、旦那にお願いしよう。

二人ともぐっすり寝ているのを確かめて、私は母の向かいに座った。彼女はそこでコーヒーカップに手を添えたまま、孫娘の方を眺めている。

「近くで見えてきたら？」

母は首を振って、「起こしちゃ悪いから」と言った。私は「そんなこと、気にしなくてもいいのに」と言いながら、卓上に放り出してあつたレシートを引き寄せた。金額を確かめながら、財布を開く。

母は私の動きを見ながら、「ああ、いい」と手を振った。

「本当にいいの？」

「いいよ、タマには。お父さんも、外で飲んでるし」

父の件と、母が今夜の食費を出してくれるのがどう関係しているのかはよく分からないけど、康徳さんが外食するからと宅配ピザを取ってしまった私には、異議を唱える余地はない。

「で、そっちはどう？」

「もく、バツバタ」

牧人のところに晴ちゃんが生まれて、半年ちよつと。まだまだ実家で同居には至らないようだけど、受け入れを見越した掃除や片付けが大変らしい。私たちも

時々手伝いに行くものの、そんなに手助けができているとは思えない。

「じゃあ、やっぱり年始は長居しない方がいい？」

私の質問に、母が顔を歪めながら考え込む。

「お泊まりは全然いいんだけど、牧人たちの予定がまだ分からなくなつて」

「あ、なるほど。じゃあ、それが分かつてから」

「ごめんね。そうしてくれる？」

私は「了解」と応えながら、手元にメモを引き寄せて「後日連絡」と書き殴つた。雄輔も同じタイミングで帰ってくるなら、上手に調整しないとダメ、か。

「でも、もう確定しないとお節とか大変なんじゃないの？」

「本当にねえ。あんたはどうすんの？」

「ウチはまだ、クリスマスとかもあるから……」

母と違つて、手作りするとも限らないし、そもそも大した物は毎年作らない。子供らがもう少し大きくなつてきたら、そういうのもやんなきゃいけない気がするけど、その時はその時で助けてもらおう。

母の方を見ると、彼女は娘たちの方を見ていた。コーヒーを飲み切り、時計を見上げると、「さて、そろそろ帰ろうかな」と言った。

「康徳さんはまだなんですよ？」

彼女にそう言われてスマホを確かめるものの、「帰る」というメッセージはまだ来ていない。母は椅子から腰を上げ、静かに伸びをした。私は娘たちの様子を見に近寄つた。

「起こさなくていいよ」

母はそう言いながら、パパッとコートを着て、マフラーを巻いた。そそくさと玄関の方へ向かう。せめて玄関までは見送らなければと、私は慌てて母の背中を追いかけた。

初出 令和三年一月一日 アルファポリスにて公開

一月二十九日（金）

コーヒー豆が焙煎される香りを身体中に浴びながら、私たちはホイップクリームが添えられたバームクーヘンに、フォークを入れた。クリームを乗せて口に運ぶ。

「うん、美味しい」

向かいに座る史穂さんは、コーヒーとのマリアージュも含めた感想を言った。

決して広くはないお店に、定期的に人が入ってきては、コーヒー豆や焙煎を頼んでいく。お隣のお客さんも、焙煎待ちついでにお茶をされている人らしい。

「年内は今日までなんだって」

史穂さんに言われて、「あ、なるほど」と膝を叩いた。そういえば、この辺りのお店も何件かは「謹賀新年」や「賀正」と書かれた年末年始休業の案内を出していた。

「ウチも形の上では昨日からお休みなんだけど、出社しないだけでカタカタやってるわ」

「ウチもです」

史穂さんは、「それ、ウチのせいよね？ ごめんなさい」と言った。私は即座に「いえいえ、とんでもないです」と答えた。

「森田さんご夫妻には、大変お世話になりました。また、来年もよろしく願います」

「ああ、いえ、こちらこそ、お世話になりました」

史穂さんが深々と頭を下げるから、私も頭を下げた。向こうがなかなか頭を上げないから、こちらも頭を上げにくい。たつぷり間を置いて、史穂さんが頭を上げ、私も合わせるように頭を上げた。

史穂さんは、思い出したようにフォークを手に取り、バームクーヘンを一口大に切る。

「今日は、お嬢ちゃんたちは？」

「旦那と、私の下の弟が」

彼女は新しく入ってきたお客さんを目で追いかけているから、コーヒーカップを口

元に運んだ。

「お宅は？」

「ウチはほら、みんな自由だから」

史穂さんは、ケラケラと笑いながら言った。二人とも思春期、中高生ともなると手がかからなくなるのも当然か。いつかウチも、そんな風になるんだろうか。それはそれで楽なんだろうなと思う反面、寂しい気もする。

「あそこで芽衣さんとすれ違ったおかげで、私も今、ちよつとだけ自由だし」

彼女はニコツと笑った。そんな彼女はかなりの軽装、私も大した荷物もなく、すぐその駅前ですれ違った。彼女は向こうの郵便局へ、私はすぐその銀行へ。年内最後の平日にバタバタしていたら、史穂さんとすれ違って、「ちよつとお茶しない？」と今に至る。

「あ、もしかしてすぐに帰らなきゃいけなかった？」

私がぼんやりしていると、史穂さんが申し訳なさそうに言った。私は慌てて、「いえ、全然、大丈夫です」と言った。

「良かったー。この時期はどうしても、私たち主婦はバタバタするもんね」

彼女は残りのバームクーヘンを食べ、コーヒーを飲んだ。お皿に残っていたクリームを上手にフォークの上へ乗せていく。

「だから、休める時には休んどかないと」

かき集めたクリームは口に入るのかと思いきや、コーヒーの中に投入された。コーヒーをよくかき混ぜながら、「ね？」と私に笑いかけた。私も釣られて、ふつと笑ってしまった。

史穂さんは、私が食べ終わるのを待ってくれた。私が取ろうと思った伝票を彼女は目の前でサツと持つて行って、私が財布を出す前に払い終わってしまった。

お店の外に出て、横の駐輪スペースに止めた自転車のカギを外しながら、「すみません、ご馳走様です」と言うと、彼女は「気にしないで」と自転車のスタンドを上げた。

「じゃあ、良いお年を」

史穂さんは狭い歩道を、自転車を押しながら駅の方へ歩いて行った。私はそれを見送りながら、反対方向へ自転車を押して歩く。彼女も今頃、自転車に跨っているんだろうなと思いつつ、周囲を見回した。

初出 令和三年一月二八日
アルファポリスにて公開

二月三日(日) 午後〇時

なんちゃっておせち作りにも区切りを打って、キッチンを旦那に明け渡す。どうしても作っておきたいものは一通り済んだし、どうせ、お互いの実家を行き来して適当に摘むから、今のところは自分たちの食べたいものと、作りやすいものさえ作ってしまえば、それでいい。

義実家の味は義姉さんが受け継いでるし、実家の方で受け継ぐべきレシピはせいぜいお雑煮ぐらい。どうしても食べたかった時に、記憶を辿って作れたこともある。どうしてもというものがあれば、牧人の奥さん、桃子さんに頑張ってもらおう。

康徳さんの手で、主に子供向けのカレーが作られていく。お昼を済ませたら、あとは明日のお雑煮用の準備と、夜のお蕎麦が段取りできれば十分。午後は子供たちを連れ出して外へ行ってもらおうし、時間ができれば年内最後のお絵かきまでやればベストではある。

「明日は何時着だっけ？」

康徳さんはルーを鍋に割り入れ、お玉でかき混ぜながら言った。私はスマホを取り出して、母とのやりとりを確認する。

「えーっと、お昼前ならOKだっけ」

「お昼前、か。泊まれるなら今晚行っちゃう方が楽な気もするけど、それはダメなんだよね？」

私が頷くと、彼は「そっかー」と言いながら、鍋の様子を見て火を点けた。だんだん、カレーの匂いが強まってくる。

「布団が足りないんだって」

「じゃあ、仕方ないか」

私は彼の動きに合わせて、食器とご飯を用意しようとする。彼は「あー、いいよ。ゆつくり座ってて」と私に食卓へ座っているように勧めた。

「朝から動きっぱなしだろう？ 昼ご飯ぐらい、僕に任せて」

彼はカレーが焦げ付かないようにかき混ぜながら、ご飯や食器の準備を進める。娘たちのスプーンも並べ、ドリンクも用意した。匂いに誘われた娘たちが、準備

がバッチリ整った食卓へやって来る。

私は二人を連れて、洗面所へ移動した。彼女らと手をしっかり洗い、食卓に戻る。康徳さんは、私たちが戻って来るタイムミングに合わせて、配膳を終えた。娘たちを椅子に座らせ、「いただきます」と食事を開始する。

今日のカレーも、いつも通りにちゃんと美味しい。明日明後日とおせちに飽きても、このカレーが待っているのは心強い。

「明日の朝からだ、めっちゃくちゃ混みそうだよ」

康徳さんはカレーを口に運びながら言った。道路状況は確かに、彼のいう通りだろう。とはいえ、今日もすでにそれなりに混雑しているとも聞く。

「思い切って電車、も混むよね。多分」

私はそれにも頷いた。頑張つて電車で行ったとしても、恩恵はほとんど受けられない。行きも帰りも手間が増えるだけ。だったら、飲めないドライバーさんには申し訳ないけど、渋滞を覚悟で車を選んだ方が賢明な気がする。

「めっちゃくちゃ早い時間に出発して、どこかで時間調整する？」

康徳さんは、「二人が寝ている間に車に乗せてさ」と付け加えた。

「早くって、何時ぐらい？」

「六時じゃあんまり変わらない気がするから、五時とか？」

五時か。早めに寝れば無理な時間ではない。ただ、そんな早くに出たとして、時間調整するような場所があつたっけ？

「一応、ダメ元で聞いてみるね」

私はそう言いながらスマホを取り出して、母にメッセージを送ってみた。カレーを食べている間に、「早くても大丈夫だよ」と返事が来た。

「お父さんが起きているから、来てくれても大丈夫、だつて」

康徳さんは「そっか、そっか」と頷いた。父も老いたとは言つてたけど、もうそんな調子だったとは。私は、「じゃあ、そのつもりでよろしく」と母に返信した。

(完)